

E・トッド著「デモクラシー以後 - 協調的『保護主義』の提唱 - 」藤原書店 2009年6月30日刊を読む

識字化による興隆と高等教育による衰退

1. しかし社会はそれぞれ独自のリズムと歴史を持っています。例えば本書の中で私は、識字化の興隆、識字化による知的条件の一様化と均一化を、極めて直接的に民主主義の興隆と結びつけています。私に言わせれば、それは民主主義の興隆を可能にした要因なのです。もちろん識字化は全世界的な現象ですから、世界中至る所で研究することができます。これからはこの現象の研究の主たる対象となるのは、中国と、インドのかなりの部分になると、言っておきましょう。
2. 次に私は、中等・高等教育の発達による文化的再階層化について検討します。本書の中では、フランスとイングランドの比較をいささか系統的に行ない、「格差の追いかけてこ」とも言うべきものを分析しました。そして、例えばフランスには停止現象が起こったことを明らかにしようとしてきました。フランスは最近の局面において長い間、学生の数ではいささか先を行っていました。イングランドは、大学の数は少なく、学生数も極めて限られるという貴族制的構造を保持していたからです。ところがブレア主義の時代になると、逆に大爆発が起きたのです。ですから英仏海峡の両岸にある二つの国では、変化のテンポは完全に違うのです。
3. 高等教育を国ごとに比較するのは非常に困難です。識字化とはどんなものなのかは、アルファベットではない中国起源の表意文字の国についても、だいたい分かります。ところが高等教育システムとなると、正確な比較を行なうためには、国ごとにどんなものなのかを知らなければ話になりません。私はイングランドのことは分かります。学業の一部をあちらでやりましたから。しかし日本の高等教育システムのことは知りません。そこで『日本統計年鑑』を調べました。驚いたことの一つは、この年鑑で年ごとの新入学生数を調べ、いささか乱暴にそれを18歳人口ないし19歳人口と比較すると、全く特殊なテンポが観察されるのです。80年代には、大学入学年齢層はおそらく四分の一のレベルに留まっていたのが、1990年から2007年までの時期には逆に、ほとんど47%に達する大量の増加が見られるのです。それは人口統計学の観点からは、日本で若者の数が減少した時期に起こっています。そのことは、私がアメリカ合衆国やフランスについて記述した文化的停滞状態に、日本は到達することが全くなかったということの意味しているように思われます。ですから特殊な歴史がここにあるのです。しかし、この変数自体は非常に意味深く重要です。おそらく近い将来に、日本も教育上の停滞状態に入ることでしょう。他の国よりは後になりますが、やはり他の国と同様に。
4. この本は暗に二つの状態を記述しています。私のモデルでは、民主主義の出現は大衆識字化に結びつき、民主主義のある程度の衰退は、中等・高等教育による社会の教育上の再階層化に結びつきます。民主主義の衰退現象を研究するとなると、私はヨーロッパ全体と日本を一括りにして扱います。しかし中国はどうかと言うと、現在、大衆識字化が完了しつつある段階です。高等教育システム

ムの発達は見られます。それは否定できませんが、過大評価してもいけません。それに高齢の年齢層を見てみると、まだ文盲がいます。中国という国は、民主主義の全世界化の問題をめぐるテストケースです。何しろこの国は民主主義国ではなく、いまだに権威主義的システムの国なのですから。もし中国が民主制に移行することがないのなら、それは、大衆識字化による民主主義の全世界化という観念は不十分なものである、ということの意味することになるでしょう。

5 . さらにスウェーデン型、ドイツ型、日本型の直系家族社会で民主制が相対的に保護されているという点に関しては、別のことがあります。私は本書の中で民主制の民族的起源について、かなりの紙数を費やしています。民主制はフランスやアメリカ合衆国では、普遍的なものとなろうとしましたが、こうした民主制の理想以前の、原初的民主制があります。私はこうした混濁した民主制の構成要素について、アテネやイスラエルの例を挙げて言及しています。民族意識がより強い、というのが、直系家族社会の特徴の一つであることは明らかです。このことは民主主義を防御する要因として働きます。スウェーデン人、ドイツ人、ないし日本人には、国民への帰属意識の独特な形がありますが、これは市民の平等という観念の防衛に通じます。もちろん、自国以外の世界に対して、ということですがけれども。これについても本書の中で説明されています。

P4 ~ 7

[コメント]

- 2009年10月15日 林明夫記 -